



論 說

新年を迎へて

黒 數 學 勇

私は此の兩三年間新年を迎へる度毎に、是れと云ふて特別芽出たくも感じません、と云ふても芽出たくない譯でもありませんが、たゞ斯んな事を其れから其れへと考へまして、今年こそは何でも努力してと思ふのでありますが、『元旦やまたうかゝの始め哉』と云ふ古歌の通り何時も知らず／＼無意味に三百六十五日を送るので、遂に閑古鳥にも笑はれるやうな、始末であります、そこで本年は實行せあくても、新年に際して斯んな事を思つたと云ふ事丈でも記憶して居たいと云ふ希望で、貴重な紙面を費してくだらぬ御話を致しまし

て、自分の印象を深くするのみであります。

人間が此の世に生れて纔か五十年間か乃至七十年間の一生を送るのに、是非とも無くてはならぬのが衣食住の三つでありますが、其衣食住でも絹布に捲かれて山海の珍味を食し、金殿玉堂に住まずとも、人の軒端に食を乞ひ、千切れぼろを纏ふて橋下に住むとも、一生と云ふ点に於ては別に變りはありません。如何に金満家でも二百年も三百年も生きるものでなく、如何に赤貧の者でも二十年や三十年で死ぬる者計りありません、こんな風に段々考へて見ますと、人間一生は六ヶしく云へば、幾何でも六ヶしく、容易くいへば幾何でも容易く、何方にでも暮せるものであります。其れにも拘らず、私等はやれ宗教だのやれ道徳だのと、小六ヶしく規則がましい生活をせねばならぬのであらうかと云ふのが、第一に起る問題なのであります。そこで私は此点に就て充分考へて見なくてはなるまいと思ふのであります。其れは何であるかと申しますと、人間は何を目的で一生暮した

ら良いかと云ふ問題であります、簡単に申しますと、人間一生は徒に世間の五欲を貪つて、そうして、食て飲んで寝て死ぬるのを目的としたら良いのでありませんか、私は決して左様では無からうと思ひます、人間は其様な價値の無いものではあるまい、そうしてもつと立派に快樂の一生を送るべく目的であくではなるまいと存じます、また誰れも、こんな目的で居るのでありませう、で如何にしたら良いかと申します前に申しました衣食住が充分に足り、其上名譽とか權威とかを思ふ儘に得た人でも、不安の一生を送る人が少くないのであります。それで赤貧の者はどうかと申しますと、其日暮して何等の名譽も何等の權威のない人でも、苦痛の一生を送る者計りありません。なせそんなに不安か、そうして苦痛の一生を送らねばならぬのかと申しますと、終生永久にどうしても、動かす事の出来ない眞正の精神的快樂を得ぬからであらうと思はれます。てありますから人間は世間の塵欲に醒醒せずして、先づ自己の精神的

覺醒するのが第一の目的ではなからうかと存じます。其れに次で起る問題は如何にして其覺醒するかと云ふ事でありますが、其れを申します前に、覺醒其ものは如何なる事かと申しますと、人間は宛もダイヤモンドのやうなものでありまして其根本は立派な光澤のある久遠本佛と云ふ、佛様の一分子であります、それが煩腦と云ふ土を被つて居るのでありますから、をれを磨き上げさへすれば、一大圓佛の分子と云ふ結構な佛身になる事が出來得るのであります、之れを法華經で開顯と申しまして、所謂自己の覺醒と云ふのであります。そこで前に申しました、覺醒の方法であります、之れには色々の條件を要する事であります、が、煩を避けて智識、信仰的努力と此の二要点から考へて見ますと、それにつきまして日蓮聖人は別の才覺無益かりとか、日蓮が弟子檀那等は有智無智を嫌はず、一同に他事をすて唱題せよとか仰せられて、どうしても信仰に憑らんければ眞の覺醒は不可能であると示されて居ります、又實際左様

であくではなるまいと思ひます、なせなれば古來幾多の學者が宇宙の眞理を研究して、其智的一方面では、どうしても解決が出来ず、最後に宗教の信仰に飛込んで來るのであります、これから見ましても、信仰の力でなくては覺醒する事が出来まいであらうと存じます、それでは信仰さへあれば智識は不必要であるかと申しますと、さうではありません、日蓮聖人が無益であるとかすてよとか仰せられた智識は、凡夫が偏見を起して色々迷ふ智識を仰せられたのであります。そこで色々と申しますと煩しくなりますので、一口に縮めて私の意見を申しますと、壽量品の一心欲見佛不自信身命と云ふ様な、大信仰と神力品の是故有智者聞此功德利と云ふ様な、正智識と融合したる絶對の信仰であくでは、眞に自己の開顯とか、又は覺醒をする事が六ヶしいであらうと確信し、又左様してこそ盛衰興亡の塵欲に囚はれずして、何時も不斷に、生々とした快樂の一生を送る事が出来るのであらうと存じます。終りに一言しますと私等

は、現代に生活して行きますには、物質的欲望は何處までも満足すべく努力せんければありませんが、御互に其物に囚はれずして其根底には何時も我は法華經の行者である、我は日蓮の弟子檀那であると云ふ大信仰の血液が流れ満ちて居らねばあるまいと思ひます、で上來は私が新年に際しての愚感を略述した耳であります、御互に理想通りに一々實行出来るものではありませんが、ともかくも自分は法華經の行者ありと云ふ覺悟で居れば衣食住のみならず、何事に於ても一歩づつ佛に近づいて、終には立派な佛の悟の境界に入る事が出来ると思ひますから、たゞ信の一字を忘れまい様にして、益々精神的向上に向つて充分努力せねばならぬ事であらうと存じます、で此信仰此努力を皆さんに御願ひすると共に、自分の腑甲斐あい、そうして無信仰だと云ふ事を慚愧する次第であります。

(なはり)